１月　浩々洞における浄土
ー「共同体」による経文解釈に着目して

第２回　「浩々洞註」『仏説阿弥陀経』の註釈にみる“名号”について　上

親鸞仏教センター常勤研究員
谷釜智洋

はじめに

前回の講座では１月分の全体のイントロダクションを兼ねて進行した。特に『精神界』創刊号の「誕生の辞」で読者に「苦と悲との谷を去りて、安慰と歓喜との野に遊ばむと欲する者は、ここに来れ。光明はとこしへに、こゝにましまさむ[1]」と、呼びかけ「光明」の見解を浩々洞註という記名のもと著された論稿(「光明摂取の文」)の中で示そうとしたと考えられることを口述した。第１回目の講座で予告した通り、第２回目以降の講座では『仏説阿弥陀経』を註釈した「浩々洞註」論稿を取り上げる。その中で“名号”を手がかりに「浄土」について考えていきたい。

１本講座で取り上げる『仏説阿弥陀経』について

１－１「浄土三部経」の中の『仏説阿弥陀経』

「浄土三部経は、単に浄土を表現した経典を集めたものではなく、それぞれ独自の意義をもって、人びとの往生浄土の願いに応えてきた経典[2]」と言われる。親鸞聖人は、この三経について『教行信証』化身土巻で次のように述べている。

(１)親鸞『教行信証』化身土巻

> しかるに今『大本』（大無量寿経）に依るに、真実・方便の願を超発す。また『観経』には方便・真実の教を顕彰す。『小経』（阿弥陀経）には、ただ真門を開きて方便の善なし。ここをもって三経の真実は、選択本願を宗とするなり。(下線部、引用者)

[1] 『精神界』第１巻第２号、精神界発行所、1901 年、2 頁
[2] 『浄土の真宗ー真宗概要ー』、真宗大谷派宗務所出版部、1989 年、71 頁。

（『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、338～339 頁）

（２）柏原祐義『浄土三部経講義』（明治 45[1912]年）、無我山房

我が親鸞聖人も『教行信証文類』六巻のうち、前五巻において『大無量寿経』の意を布術し、第六巻において『観無量寿経』、『阿弥陀経』の意を開説してをらるゝ。さればこの三経は浄土教正依の経典である。そして之を略称して『大経』、『観経』、『小経』とも呼び、また『大経』は二巻あるため『双巻経』とも呼び『大本』とも呼び、『小経』を『小本』とも呼び習つている。

（柏原祐義『浄土三部経講義』、25 頁）

１－２『阿弥陀経』の特徴

・「無問自説経」

（１）親鸞『一念多念文意』

この経は「無問自説経」ともうす。この経をときたまいしに、如来にといたてまつる人もなし。これすなわち、釈尊出世の本懐をあらわさんとおぼしめすゆえに、無問自説ともうすなり。

『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、540 頁

（２）柏原祐義『浄土三部経講義』（明治 45[1912]年）、無我山房

この経は三十六度まで舎利弗尊者を呼ばせられて、叮寧に念仏の一法を勧められた。ところで、釈尊は『大経』『観経』を御説きになつて、略々念仏の功徳を述べつくされた上に、どういふわけで、更にこの経を御説き遊ばされたか。これには凡そ左の理由があるのである。

（一）出世本懐を結ばんがためである。曰く、『大経』『観経』に出世本懐の教えを述べさせられたけれども、その後また『涅槃経』などを御説きになつたから、最後に元へもどつて出世本懐を結ばせられなければならぬ。そこで釈尊は誰とも問はぬにもかゝはらず、御自から口を開かせられて此経を御説きになつた。これを吾祖聖人は『一念多念証文』に、

この経は無問自説とまうす。この経を説きたまひしに、如来にとひたてまつる人もなし。これすなはち釈尊出世の本懐をあらはさんと、おぼしめすゆえに、無問自説とまうすなり。

と申された。大概の御経は、必らず誰かの問ひによつて口を開かせられた。『大経』は阿難尊者の問ひによつて起り、『観経』は韋提希夫人の請ひよつて説かせられた如きが即ち

これである。然るにこの御経は全く釈尊御自から、他人の問ひを待たないで、御説きになつたのである。
これ即ち御入滅間際になつて、どうしても出世本懐を結ばねばならぬといふ、釈尊御自身の抑へ切れない御心があつたからである。[……]其の他、まだ数へれば、いくらもあるが、先づ主として右の理由によつて説かせられたものと窺へば宜しい。
（柏原祐義『浄土三部経講義』、明治 45 年、無我山房、688 頁）

→誰が問わなくても、釈尊自らが語り残しておかなければならかったのが『仏説阿弥陀経』と抑えられている。

・『仏説阿弥陀経』に説かれる内容(概要)

①「経の内容は極楽浄土と阿弥陀仏の所在と名義を説き、その功徳をたたえて、浄土に生まれるには一心に念仏せよとすすめ、この法を六方の諸仏が証誠護念したまうことを明かし、五濁の世のために説かれた難信の法であることを述べている[3]」

②「『阿弥陀経』は、阿弥陀仏とその浄土の功徳荘厳を説き、その浄土に生まれる道として『執持名号、一心不乱』（聖典一二九）とただ念仏の信を勧め、この念仏の信心が十方の諸仏によって証誠され、念仏する人が護念されることを説いている。したがって『阿弥陀経』は、苦悩の衆生（機）に本願のこころ（法）があらわれる相を説いた経典である[4]」

２　浩々洞註「仏の御名」

２－１　基礎情報

・『仏説阿弥陀経』の経文解釈。
・『仏説阿弥陀経』の構造上「正宗分」→「讃　極楽浄土」→「広讃」→「正報」に該当。
・「阿弥陀」の“名”の由縁が説かれた段

（１）『仏説阿弥陀経』「正報」段

彼仏何故　号阿弥陀。舎利弗、彼仏光明無量、照十方国、無所障礙、是故号阿弥陀。又舎利弗、彼仏寿命及其人民、無量無辺　阿僧祇劫、故名阿弥陀。

[3] 真宗新辞典編纂会編『真宗新辞典』、法藏館、1983 年、8 頁。
[4] 『浄土の真宗―真宗概要―』、真宗大谷派宗務所出版部、1989 年、71～72 頁。

舎利弗、阿弥陀仏、成仏已来、於今十劫。（下線部、引用者）
『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、128 頁。

→この一段は「こゝに光明寿命の無量であることを以て、**仏の御名**を解釈して、更に仏とならせられてからの時間をば十劫[5]」であることが教示されている。ここでは“名”について、「無量」の意味をあらわす「阿弥陀」について述べられている。なお、浩々洞註の「仏の御名」では、上記の下線部は引かれておらず注釈はない。

２－２　『精神界』第１巻第７号エピグラフ

・「仏の御名」が収録されている『精神界』のエピグラフ

（１）『精神界』第１巻第７号　エピグラフ

①彼の仏を何が故に阿弥陀と号するや。②舎利弗、彼の仏の光明、無量にして、十方国を照すに障礙するところなし、是故に号して阿弥陀と為す。③又舎利弗、彼の仏の寿命、及び其人民も、無量無辺阿僧祇劫なり、故に阿弥陀と名く。（『阿弥陀経』）（下線部、引用者）
（『精神界』第１巻第７号、１頁）

→浩々洞註「仏の御名」では下線部①～③の文言を分けてそれぞれに註釈を加える。

２－３　浩々洞註「仏の御名」

・「仏の御名」本文冒頭で引かれた文言

（１）親鸞『教行信証』行巻（両重因縁）

良に知りぬ。徳号の慈父ましまさずは能生の因闕かけん。光明の悲母ましまさずは所生の縁乖くきなん。能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらずは光明土に至ることなし。真実信の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母、これすなわち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。かるがゆえに宗師は、「光明名号を以て十方を摂化し、但だ信心をして求念せしむ」（礼讃）と云えり。（下線部、引用者）
（『真宗聖典』、真宗大谷派宗務所出版部、190～191 頁）

→父（徳号=名号－因）と母（光明－縁）、つまり因と縁が一つになったとしても、信心がなければ、光明土すなわち浄土に至ることはない。「真実信」つまり“信心”が本当の内因だという。光明・名号という父と母は外縁である。この信心（内因）と光明・名号（外縁）が一つになって浄土に生きる身をえることができる。だから善導大師は「**光明名号を以て十方を摂化し、但だ信心をして求念せしむ**」と、光明と名号によって十方の衆生を摂取し

[5] 柏原祐義『浄土三部経講義』、無我山房、1912 年、709 頁。

教化する。ただし信心が大事だといっている。

（２）「仏の御名」前書き①

「光明名号を以て十方を摂化し、但だ信心をして求念せしむ」、とは唐の善導師が如来救済の大用を示されたる語なり。実にや、我等の仏は名を以て、我等を助け給ふ。仏を信ずと云ひ、如来に頼ると云ふ。されど我等智眼暗くして、仏を知らず、如来を拝するを得ず。(下線部、引用者)

（浩々洞註「仏の御名」『精神界』第１巻第７号、15 頁上～下段

→浩々洞註「仏の御名」は、善導大師の『往生礼讃』前序の一文に基づき、「実にや、我等の仏は名を以て、我等を助け給ふ」と、註釈を展開していく。
また、以下のように続く。

（３）浩々洞註「仏の御名」前書き②

是に於てか、釈尊、如来の御名を示して、如来摂取の大用を、我等の耳に聞かしめ、自ら「其名号を聞いて信心歓喜せよ」（『無量寿経』）と説き給へり。
かくて、①真理に愚かなる我等、名によりて、如来の大慈を味ひ、御名を信するによりて、如来心に住するを得るぞうれしき。さればその御名とは何ぞや、南無阿弥陀仏これ、我等の救主の御名なり。南無と云ふは衆生の弥陀如来に向ひ奉りて、助け給へと申すこゝろなり。阿弥陀仏といふは、その頼む衆生をやうもなく助け給ふ謂れなり。南無と頼むが故に、阿弥陀仏の助け給ふにあらずして、阿弥陀仏の御助けを、南無と頼むなり。故に信じる心も念ずる心も阿弥陀如来の御方便より授け給ふ所なり。これ我等の信仰を他力と称する所以なり。②信じて救はるゝにあらずして、救はるゝを信じるが、我等の安心なり。されば、我等は先づ、阿弥陀仏の摂取の大用を聞かざる可らず。この摂取の大用を示し給ひたるは、即ち、今我等が将さに註解せんとする『阿弥陀経』の文正に之れなり。(下線部、引用者)

(『精神界』第１巻第７号、15 頁、下段)

→「(２)「仏の御名」の前書き」に下線したように釈尊は「我等智眼暗くして、仏を知らず･･･」の私達のために、「本願成就文」を説いたという。注目したいのは「今我等が将さに註解せんと」という箇所。

（４）浩々洞註「仏の御名」―「彼仏何故　号阿弥陀」

名を以て、あだなるものとなすこと勿れ。名は精神の顕現なり。精神動いて、こゝに名あり。名現はれて精神こゝに住む。名を尋ぬるは即ち精神を尋ぬる所以、名を明むるは即ち精神を明むる所以なり。
まことの名あるところ、まことの体あり。まことの体あるところまことの活動あり。見よ、

人、梅、とよぶ、我之をきくの時、口既に酸味を覚え、砂糖ときけば、口直ちに甘味を感ずるにあらずや。眼遥かに樹陰を望む時、身は炎熱もゆるが如き砂漠の中にあるも、涼風既に我胸を襲ふの思ほあるにあらずや。[…]かくて、我等の如来は名を以て、我等を救ひ給う。さればこのみ名はいかなる義をか有する。

（『精神界』第１巻第７号、16 頁上～下段）

→“名”は単に物をあらわすものと考えてはならない、とし精神の顕れたものだという。梅・砂糖という言葉を聞くだけで身体に酸味や甘味を感じることがそれを表しているという。だから阿弥陀は“名”をもって私達を救う。と。

（７）浩々洞註「仏の御名」―「舎利弗、彼仏光明無量、照十方国、無所障礙、是故号阿弥陀」①

如来の光明は、尊き如来の御心を我等に示し給ふ。されば、我等が如来を見るは、これ如来光明の力にして、我等が己を知る、亦これ如来光明の力なり。
如来は、其名に光明無量の意義をあらはし、其摂取照護の需用を示したまひて我等を呼ひ、我等の帰入を待ち給ふ。

（『精神界』第１巻第７号、16 頁下段）

→『仏説阿弥陀経』文言では「無量光」のいわれが説かれている箇所。

（８）浩々洞註「仏の御名」―「舎利弗、彼仏光明無量、照十方国、無所障礙、是故号阿弥陀」②

無量とははかられざるなり、限られざるなり。障礙するところなしとは善悪美醜を撰ばざるなり。野に行かば野に光あり、山に行かば山に光あり。一切を摂取して障りなし。「阿弥陀の三字をおさめ、たすけ、すくふとよむ」、この謂れなり。
向日葵の花は常に日の光に向かひ、常に日の光に順じて転ず、我等、全身常に如来光明の中にあり、而も常に如来の光明に背き、常に如来の光明に逆ひ、暗より暗に迷はむと試む。彼の草花に対してもはずべからずや。
日光の光は麗らゝかに照りそうを、之をのがれて地下の暗に狂ふ鼹鼠の愚、憐むべくは、我等の迷へるさまは、亦憐むべきなり。されど我等は鼹鼠にあらず、又鼹鼠たるべきにあらず。進みて如来の光明に憩はずは、いかにせむ。（下線部、引用者）

（『精神界』第１巻第７号、16 頁下段～17 頁上段）

→「光明無量」についての注釈。下線部は「阿弥陀」の三字に「おさめ、たすけ、すくふ」という。「光明摂取の文」では「されは摂取とは救済なり、摂理なり、おさめ、たよ（ママ）

け、すくふの三義はこの二字に表はされたり[6]」と、記されていた。

（９）浩々洞註「仏の御名」―又舎利弗、彼仏寿命及其人民、無量無辺　阿僧祇劫、故名阿弥陀①

如来はかぎりなくして唯一なり、誰か又これをそこない奉るものあらんや。既に之を損ふものなし、①いかで其上に消衰あらんや、滅絶あらんや。既に消衰と、絶滅となし。如来は常に存らへ、常にまします。寿命無量とはこの謂なり。
如来の寿命、既に無量なり、光明亦とこしへに輝きたまはむ、光明既にとこしへに輝かば、其永久なる光明の照護したまふ仏の国と仏の子と、いかでか又永久ならざることあらんや。妄りに形想の上に執して、此世の滅ぶるに泣き、此世の衰ふることを悲しむ勿れ、とはの光の国こゝにましませば。
このとはの光の国、寿命無量の国、これ我等のみ親の家のあるところなり。我等は速にこゝに趣かざる可らず。父と子と、この国に、とこしへに楽まむ。[……]②南無阿弥陀仏、このわづかなる六字の名、こゝに光明と寿命との無量なる義をあらはし給ふ。この義は空間的に十方に亘り、時間的に三世に徹す、何の徳と用と、之より漏るゝものあらんや。（下線部、引用者）

『精神界』第１巻第７号、17 頁上～下段

→ここの註釈は『仏説阿弥陀経』文言では「無量寿」のいわれが説かれている箇所である。この“光明・無量”については「光明は横(空間的)に十方の衆生を利益せんためであり、寿命は竪(時間的)に三世の衆生を利益せんためである[7]」と解釈されるものであり、ここは「浩々洞註」も通俗的解釈にのっとり言葉を添えていると考えられる。

(10) 浩々洞註「仏の御名」―又舎利弗、彼仏寿命及其人民、無量無辺　阿僧祇劫、故名阿弥陀②

我等この御名にたよりて如来を認め、この御名によりて如来に入る。この御名はこれ、如来我を安ぜしめ給ふ慈悲の杖なり。この御名はこれ如来我を引きあげ給ふ救済の網なり、この御名は如来我を渡し給ふ矜哀の船なり。この御名はこれ如来我を憩はしめ給ふ大悲の国なり。

聖人親鸞、歌ふて曰く、「変(ママ)しくば南無阿弥陀仏を称ふべし、われも六字の内にこそ住め」豈啻聖人のみならんや、世の聖賢、世の凡愚、如来の子とせられて、共にこの名号に住めり。豈啻、世の聖賢と世の凡愚とのみならんや、我如来亦自らこの名号の中に住み給

[6] 『精神界』第１巻第１号、精神界発行所、1901 年、21 頁下～22 頁上段。
[7] 柏原祐義『浄土三部経講義』、無我山房、1912 年、162 頁。

ふ。
この名号の称えられるゝ所、これ仏のましますところなり。この名号の記せらるゝ所、これ仏のあらはれ給ふ所なり。縱しこの名号を知らずとも、この名号の意義の感ぜらるゝ所、これ仏の住み給ふ所なり。

→名号による救済を述べられる。称名することと名号が掲げられる場に仏は現れる。名号の意義を知らされる場は仏の住むところであると結んでいる。